



ゴムボート袋と手作り台車



砂州と瀬



スタート地点(桜橋下)



あの日のあの川 リレー日記 ～第4話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第4話主人公 川畑 遼介

(筑波大学院 システム情報工学研究科構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)
(□川ガール・■川系男子)
(出身地を流れる川：兵庫県猪名川, 武庫川)

『僕の夏休み～桜川川下り体験記～』

いつのこと？ : 2014年9月
どこの川？ : 桜川

私は毎週金曜日、現地観測のため、車で2時間半かけて茨城県北部の里川まで出向き、朝から晩まで調査を行っている。しかし、週に1度しか観測が出来ないというのは、研究の進捗を遅らせる要因であり、弱みである。そこで、近場の川で基礎研究や観測のノウハウの蓄積、あるいはその川で1つ研究テーマを作ってしまう、色々と便利になると考えた。

そこで先生にお伺いしたところ、つくば市内で最も瀬淵がはっきりしているのは桜川ではないか、とのことなので、桜川での観測を計画することにした。

【下見・地区概要】

まずは原付で川沿いを走ることにした。桜川の出来るだけ大学から近いところで、最も瀬淵がはっきりしている場所を探そうと考えたのである。それにしても、大学を一步離れるだけで、こんなのだかな風景が見られるとは思ってもみなかった。どうやら、この地区は旧桜村という農村地域であったという。つくば市は、今でこそ研究学園都市として開発が進められているが、駅前や大学周辺から一步離れると、非常にのどかな風景が広がっている。

一方、肝心の桜川というと、岸辺が林で覆われており、水辺に近づくどころか、水面を見ることさえ一苦労であった。川沿いの広場で途方にくれていると、小学生くらいの男の子と父親がボートで川下りをしているのではないか。

「これだ・・・」僕は決意した。せっかくの夏休み、ゴムボートを使って川を下ってやろうと決めたのである。調べたところ、とある釣人のブログがヒットした。どうやら桜川は安全な釣りの名所であり、釣人の間では有名だそうである。こうして夏休みの1大イベント「桜川下り」の決行が決まったのである。

【事前準備】

ボートはネット通販で 2000 円のボートを購入した。学内の池でこっそりとボートの練習もした。いよいよコースを選定し、あとは出航を待つのみだ。

しかし、1つ問題が発生した。大学から川までの行き帰りである。国道 125 号沿いにバス停があるが、大形という地区より下流では、国道と川が離れてしまい、バス停がないのである。つまり、途中でリタイアする場合、疲れ切った体でボートをかっいで何 km も歩かなければならないのである。友達タクシーという手もあるが、ドロドロの身体とボートを見て、顔がひきつらない人はいないだろう。そこで考案したのが、写真のような手作り台車である。材料は全て百均で揃え、お値段は 700 円程度で抑えることが出来た。

【出航】

スタートは朝 10 時ごろであった。ポケットには飲み物、チョコレートを大量に詰め、パドルが流されて遭難しても大丈夫なようにした。スタートしていきなり瀬が見えてきた。段々流れが速くなり、緊張が走る。いよいよ、波立つ程の流れに突入した・・・ボートがくるくる回転し、流れに身をゆだねる・・・
「楽しい・・・とても楽しい・・・！」

まるで遊園地のアトラクションのようである。しかも、漕がなくてよいので楽である。これは、決行してよかったとさらに期待を膨らませる。もちろん、これはれっきとした研究の一環だ。瀬がある場所は、スマホの位置情報で記録しておく。

しかし楽しいことばかりではなかった。周りに岸に上げられる場所があれば、いちいち上陸して場所を確認しておき、次回研究室皆で来られるようにしなければならない。上陸自体はワクワクするのだが、岸辺が非常に柔らかい泥であり、膝まで埋まって抜け出せないといった苦勞もしばしばあった。また、川に木が倒れており、枝をかき分けながらボートを進めることもあった。しかしそんな苦勞も瀬を下ることで忘れる事が出来た。

1 時間半ほど下ると、瀬がだんだん少なくなってきた。地図アプリを調べると、高岡新田という地区の近くのような。新田の近くに瀬があるはずもない。さらに進むと、いよいよ水たまりのようになっており、ボートは逆風で押し戻される。その後も頑張って漕ぎ進んだが、瀬は見当たらない。残念だが藤沢新田の近くでリタイアすることにした。約 4km の船旅であった。ボートを降りた場所から 1.5km ほど離れたところに、金田という地区があり、そこからバスで帰路についた。ここは、旧桜村の役場があった場所であり、由緒ある立派な家が建ち並んでいた。

【まとめ】

結局、観測にふさわしい瀬は桜川には見当たらなかった。しかし、今回の川下りで夏の思い出をつくり、また元々の筑波の風景を目にし、歩くことが出来た。ほとんどの筑波大生は、開発され街となった場所にしか足を運ばないだろうし、僕もこの川下りがなければ訪れることがなかったであろう場所にたくさん行くことが出来て満足である。

(次は金子貴洋さんにバトンを託します)

